中世の風景
―未来への遺産―

史跡 骨寺村荘園遺跡（ほねでらむらしょうえん）

重要文化的景観 一関本寺の農村景観（いちのせきほんでら）

骨寺村荘園
Honedera Mura Shoen

日本の伝統的な農村景観を後世へ

かつてここは「骨寺村」と呼ばれていました

一関市厳美町の本寺地区は
その昔、「骨寺村」と呼ばれ
中尊寺の経蔵別当の所領でした。

骨寺村は、鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡』により
村の四方の境が示されており、その範囲が明らかです。
中尊寺に伝存する二枚の『陸奥国骨寺村絵図』に描かれた
中世の村の姿を、今も見ることができます。

山々に囲まれた骨寺村は
曲がりくねった水路と不整形な水田が広がり
イグネに守られた家々が点在し
神社や小さな祠が要所にまつられています。
自然を巧みに利用し
たえまない営みが醸しだす穏やかな農村の姿は
代表的な日本の原風景です。

日本中の見慣れた、美しい農村の風景が失われてゆく今
奥州藤原氏ゆかりの骨寺村は
伝統的な農村の景観が維持されている
かけがえのない貴重な遺産です。

黄金色に輝く稲穂と若神子社

歴史

中尊寺領骨寺村のはじまり

中尊寺経蔵と骨寺村

時は十二世紀。平安浄土の国づくりを理想にかかげた藤原清衡は、自らの発願による『紺紙金銀字交書一切経』の完成に功のあった自在房蓮光を、そのお経を納める中尊寺経蔵の初代の別当に任命しました。そこで蓮光は私領であった骨寺村を経蔵に寄進し、骨寺村の貢納物で経蔵の法会がまかなわれるようになりました。これが、中尊寺経蔵別当領骨寺村のはじまりです。

これ以降、骨寺村は経蔵別当領となり、藤原氏滅亡後は、この地方の地頭となった葛西氏との相論を繰り返しながら、十五世紀の室町時代まで伝領されています。鎌倉時代後期の二枚の『陸奥国骨寺村絵図』は、その過程で作成されたものと考えられています。

初代経蔵別当　自在房蓮光　中尊寺蔵

在家絵図（詳細絵図）　中尊寺蔵

仏神絵図（簡略絵図）　中尊寺蔵

絵図には、東は鎰懸、西は山王窟、南は磐井川、北はミタケ堂・馬坂の範囲が経蔵領として描かれています。鎌倉幕府の歴史書『吾妻鏡』にも同様に示されています。

江戸時代になると、この土地は仙台藩領となり、明治維新まで続きます。骨寺が本寺とよばれるようになったのは、この時期といわれています。

骨寺村の由来

絵図に「骨寺跡」「骨寺堂跡」という文字と、建物の礎石のような図像が描かれています。かつてここに骨寺という寺があって、絵図が描かれた鎌倉時代の後期には廃寺になっていたことが分かります。今はその跡も確認できませんが、寺の名前が村の名前になったと考えられます※。

骨寺は、亡くなった人々の骨の一部を納める場所であったとも、骨寺にゆかりの人物の墳墓堂であったともいわれています。

※髑髏（どくろ）伝説

鎌倉時代の『撰集抄』という仏教説話集に、平泉郡にいた一人の娘が、天井裏の髑髏から法華経を習い、その髑髏を逆柴山に葬ったという話があります。その髑髏は、比叡山の高僧第十八代座主の慈恵大師良源の髑髏で、葬った場所が慈恵塚だと江戸時代中期にはいわれるようになっていました。

この説話が、骨寺村という名前の由来であるともいわれています。

航空写真（平成10年）

航空写真（昭和22年）

絵図

中世と現在を比較する

骨寺村絵図には東西南北の境が示されていて、田屋敷などの様子が写実的に描かれ、村の雰囲気を伝えています。

現在、国内には四十点ほどの代表的な荘園絵図がありますが、ここまで写実的に描いたものは他にありません。

絵図を見ながら現地を散策すると、中世の村の姿を思いうかべることができます。

在家絵図（詳細絵図）　中尊寺蔵

北側

連続した山並みを南から見たように描いています。山の稜線を太く描いているのは、そこが骨寺村の北の境であったからです。この絵図は、境界の確認のために作られたものです。

平野部

上空から見たように水田がかたまり状に点在し、そのかたわらに家があるように描かれています。この家と田のセットが、中世の古文書に記された「田屋敷」です。「田屋敷」のそれぞれの名前の中には、現在の屋敷名に受け継がれているものもあります。

正面（西側の山並み）

水平な目線で西側を見た風景を描いています。はるか向こうの駒形（栗駒山・須川岳）まで描いているのは、この山が村の生活にとって重要だったからです。

南側

南の山並みが北より簡単に描かれているのは、そこが村の外だからです。境界にあたる「石ハ井河」（磐井川）の急流の様子は現地を知っていなければ描けません。

東側

現実には南北の山がせまってきて狭い谷になる風景を、一続きの山並みのように描いています。また、磐井川の崖に張り付くように描かれている古道は危険だったので、新たに馬坂新道（まさかしんどう）が造られたと考えられています。

骨寺村荘園遺跡と農村景観

国史跡

中世の骨寺村、すなわち現在の一関市本寺地区にある「骨寺村荘園遺跡」は、国の重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』に描かれた堂社などの跡が多く残り、中世からつながる景観が良好に保たれ、絵図の世界を体感できます。このことが評価され、平成十七年三月、絵図と現地との対比が可能な堂社や窟などの九つの区域が、国史跡「骨寺村荘園遺跡」として指定されました。

景観計画区域と重要文化的景観

本寺地区では、史跡指定地はもちろんのこと、水田や居住域と里山の範囲が景観法の「景観計画区域」に定められ、さらにそのうちの中核部分が国の重要文化的景観「一関本寺の農村景観」に選定されました。これによって、この地区の景観は、国指定の史跡に加えて二重三重の保護が図られることになりました。

中世以来の姿を残している本寺地区の農村景観が、かけがえのない価値を持つと認められたのです。

骨寺村荘園遺跡

遺跡解説

①慈恵塚（じえづか）・**拝殿**（はいでん）

本寺地区北側に連なる山並みの東の端を逆柴山といい、その頂き付近に慈恵塚があります。塚は直径約10ｍあり、周囲には溝と土塁が巡ります。現在は、江戸時代に築かれた石祠なども残っています。

拝殿（大師堂）はその山裾に位置し、慈恵大師を祀っています。

②不動窟（ふどうのいわや）

慈恵塚の西側の山の中腹にある岩屋で、骨寺村絵図にも描かれています、高さ約３ｍ、奥行き約13ｍの洞窟で修験者の活動の場所であったと考えられています。

③若神子社（わかみこしゃ）

骨寺村絵図に「若御子社」として描かれており、平野部東側の田んぼの中に今もあります。「若御子」とは親神から分霊された子の神を指し、近年の研究では駒形根（栗駒山・須川岳）に坐す駒形神が分霊された里宮であると考えられています。

なお、現在も残る地名の若神子は「わかがみこ」と読みます。

④要害館跡（ようがいだてあと）

北側の山並みにある戦国時代の山城で、本寺十郎左衛門の居城と伝えられています。

⑤遠西遺跡（とおにしいせき）

発掘調査によって、整地された平坦面と掘立柱の建物の痕跡が確認されています。十二～十三世紀の土器と陶器が発見されていて、中世の生活の跡と考えられています。

⑥伝ミタケ堂跡（でんみたけどうあと）

北側山並み西部の山頂付近にミタケ堂跡と伝えられる場所があり、付近の平場からは、西に山王山を、眼下には平野部を展望することができます。山岳信仰の聖地だったと考えられています。絵図にも描かれており、当時の村の北境でもありました。

⑦梅木田遺跡（うめのきだいせき）

発掘調査によって、十三世紀の中国産陶器の破片が発見されました。遠西遺跡で発見された土器や陶器と共に、平泉からもたらされた物と考えられます。

⑧駒形根神社（こまがたねじんじゃ）・**白山社**（はくさんしゃ）

駒形根神社は、骨寺村絵図の西端に描かれている「駒形」「駒形根」（栗駒山・須川岳）を祀っているところです。絵図にも描かれている「六所宮」と考えられています。

白山社は、石川県の白山比咩神を請じ迎えたところです。白山比咩神社は中世には比叡山の末院となり、白山神人は天台宗勢力の伸張のために活躍しました。

⑨山王窟（さんのうのいわや）

骨寺村の西境の山王窟は、天台宗の本山延暦寺の地主神「日吉山王神」をまつっています。日吉山王神が、骨寺村の西端の高所に据えられているのは、天台宗寺院中尊寺の所領であるためと考えられていましたが、最近の研究では自在房蓮光の私領であった以前から存在していたといわれています。

⑨山王窟

⑧駒形根神社

⑧白山社

⑦梅木田遺跡

⑥伝ミタケ堂跡

⑤遠西遺跡

④要害館跡

③若神子社

❷不動窟

❶拝殿

❶慈恵塚

一関本寺の農村景観

一関本寺の農村景観の特性

1 現在の本寺地区は、中世に描かれた絵図と、堂社・水田・屋敷地の配置構成が極めて類似しています。たとえば絵図に描かれている、屋敷と水田のセットは、中世に田屋敷といわれていたもので、屋敷地の点在する景観は今も見られます。

2 冬の西風の強い本寺地区では、屋敷はイグネ（屋敷林）に囲まれています。また緩やかに傾斜する自然地形に沿ってつくられた用水路網や、田越しの灌漑（かんがい）が残っており、それらが周囲の里山とあいまって、調和のとれた農村景観となっています。

3 雑木林の里山と、自然地形に合わせた水田、それに屋敷林に囲まれた人家と畑からなるこの地区では、多様かつ複合的な環境のもとで、豊かな生態系が維持されています。

4 中世の骨寺村の水田は、丘陵部からの沢水と本寺川の水を利用するものでした。江戸時代に磐井川の水を山王山のふもとで水路により引き入れることで、水田を拡張しました。しかし、村の水系そのものは大きく変わることはなく、緩やかにくらしを発展させてきた様子がうかがえます。

重要文化的景観の概要

一関本寺の農村景観は、史跡としての価値に加えて、右に記したような特性をもっていることが評価されて、平成十八年七月に重要文化的景観に選定されました。

文化財保護法において文化的景観とは、里山や棚田などのように「地域における人々の生活又は生業及び地域の風土により形成された景観地で、我が国民の生活又は生業の理解のために欠くことができないもの」をいい、このうち特に重要なものが重要文化的景観に選定され、保護の対象となります。

イグネに囲まれた、のどかな農村景観

「ひらいずみ遺産」として

ひらいずみ遺産とは、世界遺産「平泉」の構成資産と、「平泉」をより深く理解する上で欠くことのできない関連資産からなります。

岩手県、一関市、奥州市、平泉町が協力して、ひらいずみ遺産の保存と活用に取り組みます。

「ひらいずみ遺産」の構成資産

中尊寺

毛越寺

無量光院跡

観自在王院跡

金鶏山

柳之御所遺跡

達谷窟

骨寺村荘園遺跡

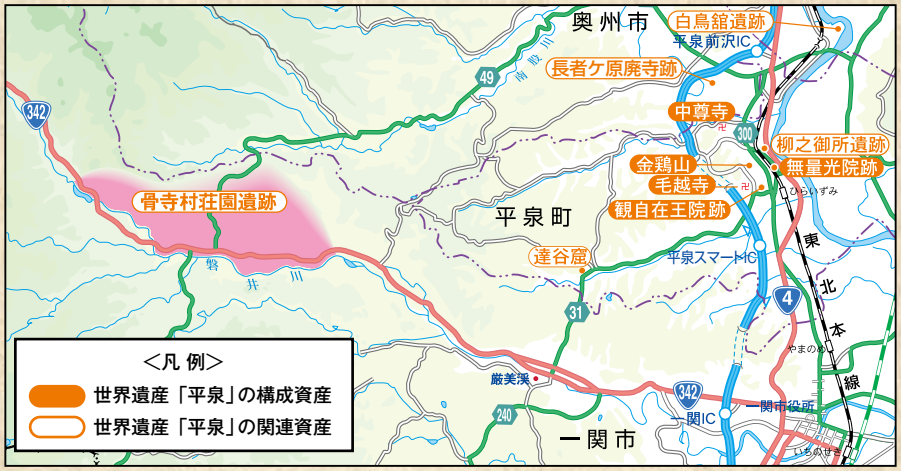
白鳥舘遺跡

長者ケ原廃寺跡

写真提供

・中尊寺 ・毛越寺 ・柳之御所遺跡 ・達谷窟 ・骨寺村荘園遺跡	中尊寺 公益財団法人岩手県観光協会
・無量光院跡 ・観自在王院跡 ・金鶏山	平泉文化遺産センター
・白鳥舘遺跡 ・長者ケ原廃寺跡	奥州市教育委員会

「ひらいずみ遺産」分布図



遺跡と景観のこれから

本寺地区に残されてきた、中世の農村を彷彿させる文化的景観は、まさに「生きている文化財」です。そして、本寺地区に生活し、農業を続けることは、中世からの歴史を継承し、その景観を維持することでもあります。本寺地区において日常の生活と文化財の保護は、極めて密接に関わっています。

このため、本寺地区では、遺跡・景観の保存・活用に配慮した地域づくりが進められています。景観を阻害する大型廃棄物の除去作業や、営農の継続のために必要な景観保全型の農地整備の実施、農村の魅力を広く伝えるための体験交流イベントの開催など、幅広い取り組みが行われています。

一関市では、今後も骨寺村荘園遺跡の調査研究を続けるとともに、こうした地域づくり活動を支援しながら、文化財としての価値を守っていきます。

I N F O R M A T I O N

飛行機（いわて花巻空港・仙台空港まで）

札幌(新千歳)	約1時間	いわて花巻	車で約5分	花巻空港IC	東北自動車道他 約43分	一関
福岡	約1時間45分					
大阪(伊丹)	約1時間20分		車で約10分	新花巻駅	東北新幹線 約28分（最速）	
名古屋(小牧)	約1時間10分					
神戸	約1時間30分					
札幌(新千歳)	約1時間10分	仙台	車で約10分	仙台空港IC	東北自動車道他 約1時間10分	一関
名古屋(中部)	約1時間10分					
大阪(伊丹)	約1時間10分					
大阪(関西)	約1時間20分					
神戸	約1時間20分					
広島	約1時間20分					
福岡	約1時間40分					
那覇	約2時間35分		電車 約17分	仙台駅	東北新幹線 約21分（最速）	

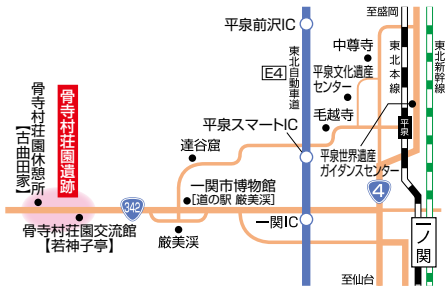
東北自動車道（一関ICまで）

川口JCT	約4時間20分（420.3km）	一関IC
仙台宮城IC	約55分（87.9km）	
盛岡IC	約57分（91.8km）	
青森IC	約2時間54分（259.2km）	

JR東北新幹線（一ノ関駅まで）

東京	約1時間54分（最速）	一ノ関駅
仙台	約21分（最速）	
盛岡	約27分（最速）	
新青森	約1時間40分（最速）	
新函館北斗	約2時間47分	

◆ 一関ICから骨寺村荘園遺跡まで車で約20分
◆ 一ノ関駅から骨寺村荘園遺跡まで車で約30分
※一ノ関駅からは路線バスが運行しています（1日数本運行）



◎お問い合わせ

一関市教育委員会
骨寺荘園室
〒029-3105 岩手県一関市花泉町涌津字一ノ町29
TEL 0191-82-2245 **FAX** 0191-36-1668
E-mail honedera@city.ichinoseki.iwate.jp

※現地案内に関するお問い合わせ
骨寺村荘園交流館
〒021-0101 岩手県一関市厳美町字若神子241-2
TEL・FAX 0191-33-5022
休館日 毎週火曜日　年末年始　**開館** 9:00から17:00
URL https://www.honedera.jp